



令和5年度第4回 刈谷市国際化・多文化共生推進委員会 議事録

■ 日 時 : 令和6年3月18日(月) 13時30分～15時00分

■ 場 所 : 刈谷市役所4階401会議室

■ 出席者

所 属	氏 名
愛知淑徳大学 名誉教授	榎 田 勝 利
刈谷市教育委員会 学校教育課	清 水 都世子
愛知県国際交流協会 交流共生課	杉 山 美 紀
刈谷市国際交流協会	西 村 日出幸
一ツ木自治会	及 川 啓 太
株式会社ベルテック	小 池 ソニア
刈谷市 市民活動部 部長	近 藤 和 弘

■ 欠席者

国立大学法人愛知教育大学 国際企画課	高 木 遠 慧
株式会社デンソー 総務部刈谷総務人事室	北 野 達 生
認定特定非営利活動法人 アジア車いす交流センター	木 村 隆 彦
S B K	川 口 ビバリ
市民委員	ファミ ティ ホン トウイ

■ 事務局

市民活動部 市民協働課長	渡 部 貴美子
市民活動部 市民協働課長補佐兼協働推進係長	小 原 崇 照
市民活動部 市民協働課 協働推進係 主査	眞 野 浩 志

市民活動部 市民協働課 協働推進係 主事	木 下 和 希
NPO 法人 NIED・国際理解教育センター 代表理事	伊 沢 令 子
NPO 法人 NIED・国際理解教育センター 事務局長	川 合 眞 二

■ 配付資料

次第、名簿

資料 1 第 2 次刈谷市多文化共生推進計画（本冊）

資料 2 第 2 次刈谷市多文化共生推進計画概要版

■ 議事録

1. 開会

◇出欠席者の確認、配付資料の確認。

◇委員長あいさつ：

この 1 年間、第 2 次刈谷市多文化共生推進計画の議論をしてきたが、今日で一区切りとなる。刈谷市は 10 年間以上にわたり、継続的に計画推進について議論してきた。県内他自治体にも関わってきたが、議題を承認するだけの委員会も多かった。このように、計画を立てて終わりではなく、市民の代表や専門的な人が集まって、どう実行していくかを議論する取組は少ない。

現在、私は、年間の半分をアメリカで生活している。コロナ禍以降、アメリカが大きく変わってきている。不法滞在者が約 1, 100 万人いると言われていて、約 25% は農業に従事している。その他建築、製造業、飲食店で働き暮らしている。フロリダ州は、首長が外国人不法滞在者を排斥する政策を行った結果、農業、建設の現場が人手不足で成り立たなくなってきた。1 日 3～4 万円の日当を払っても働き手がいない状況である。

教育現場、ビジネス界でも大きな変化があった。コロナ禍において、学校に行けない、会社に行けないとなった結果、オンラインが普通になった。仕事は自宅でできる時代になった。教育現場でも教員離職が多く、学校の質が落ちて、教育格差が広がっている。

こうしたアメリカの状況を教訓に、日本で今後どうしていくか。大きな課題は、偏見や差別である。自分がアメリカで生活していると、人種的な差別を多く見聞きする。日本でも同様な課題が今後、出てくると考えられるので、施策の中に生かしていくことが望まれる。

刈谷市では、今後 10 年間の計画はできた。その第 2 次計画の説明と第 1 次計画の総括を踏まえて、本日は、委員の皆様の率直な意見を伺うことに、多くの時間を使いたいと思う。

2. 議題

(1) 第2次刈谷市多文化共生推進計画について

◇事務局が、資料1・資料2をもとに、第2次刈谷市多文化共生推進計画について説明した。

◇上記説明事項について、以下のとおり質疑応答、意見交換を行った。

委員：P.49、「関係団体との連携強化」の施策「30企業等との連携」では、協力してくれる企業への働きかけはどうなっているか。

事務局：目標10社に対して令和4年度は0社である。商工業振興課とも連携しながら、企業と話す機会を持ち、連携企業を増やしていく予定である。本年度は、日本語教室において、企業内広報に協力していただいた実績がある。

委員長：刈谷市は大企業を含め、企業が多い都市で、外国人の労働者も多い。企業と関係を深めていくことが大切である。同時に企業の中の人材をどう活かしていくかも重要である。田原市ではトヨタ関連企業が多く、企業の職員がボランティアで日本語教育を実施している例がある。市民団体も含めて、企業のリソースをどう多文化共生に活用していくかがポイントになる。

委員：多岐にわたる施策があり、他の関係課との連携が必要な取り組みがあると思う。継続して取り組んでいってもらえるとよい。日本語適応指導教室の数も増える予定であり、教員に多文化共生の意識を持ってもらえるよう計画の内容を伝えていきたいと思う。

委員：目標達成のためにやさしい日本語で展開することが大事であると考えている。情報発信、コミュニケーションにおいては、ICTを活用した施策の工夫ができると思う。企業とはそうした協力関係もできるとよい。

委員：現状の課題がよくまとまっており、それを基にした計画がよい方向に向かうとよい。施策「30企業等との連携」については、ワールドデンでアイシン学園と協働した経験がある。ただアイシン学園の外国人の方は、休日も忙しく、来られる回数は少ない状況である。もう少し連携していけたらよかったが、難しい面があると思った。ワールドデンは、SBK（フィリピン人コミュニティ）、VNK（ベトナム人コミュニティ）、オアシスブラジル（ブラジル人コミュニティ）との交流がある。さらにその交流の輪が広がっていくとよいと思う。そうした外国人コミュニティがあることは、ワールドデンなどの具体的な活動に参加しないとわからない。

委員長：ワールドデンの認知度はどうか？

委員：一ツ木地区においては、ワールドデンは認知度が高まり、「よくやってくれているね」という反応がある反面、若い世代には意外と知られていないので、通りがかった人に声かけしたり、回覧板を回したりしている。認知度を上げたいと考えている。

委員長：リーダー的な人は増えているか？

委員：イベントの企画など積極的に手伝ってくれる人が増えている。少しずつ核となる人が増えてきていると思う。

委員長：改善したい点はあるか。

委員：現状として満足度は比較的高い。最近はベトナム人コミュニティのメンバーが多く参加してくれている。ホームパーティーにも呼ばれてワールドデン以外での交流にもつながっている。中学生がボランティアで来てくれ、継続的に関わってくれる生徒もいる。若い世代に広がっていくとよいと考えている。

委員：ライフステージにおける支援が今後、重要になる。高齢の外国人に対する支援として、介護施設への入所のサポートも今後必要になるため、支援をお願いしたいと思う。愛知県国際交流協会においてもそうした相談があり、市役所に繋いでいる。多言語対応も必要であると考えている。

委員：オアシスブラジルは、ライフステージごとの困りごとに対応したいと思い、まずは「親しい人が亡くなった時に」のYoutube 動画を作成した。困りごと相談を受けることもあり、分かることはメールなどで対応したりしているが、なかなか個別に対応することは難しい場合もある。

委員：外国人コミュニティを持続可能なものにしていくためには、キーパーソンが重要となると思う。また、企業との連携も重要となると考えている。中小企業コンシェルジュという、企業の問題を情報収集する役割の人が市役所の商工業振興課にいたので、その人を介して、労働者の困りごとなども把握していけたらいいと考えている。コミュニティと行政をつなぐためには、コミュニティの中でのリーダー、キーパーソンが重要になると思う。多様な外国人が増えると、さまざまな障壁や日本人との摩擦も生まれる。それが差別に繋がってはいけない。「ご近所づきあい」が日本のいいところでもあるので、そういった考え方を大切にしていけるとよいと考えている。

委員長：グローバル人材、地域に詳しい人材が重要になってくる。プランナーやつなぎ役となるキーパーソンが必要である。多くのまちづくりは、最初は外から人がやってきて、その人たちが地域人材育成に関わり、その内に地域のリーダー、キーパーソンが生まれてくるという流れがある。

(2) 前計画の総括について

◇事務局が、前計画の総括として、1次計画の主な活動の様子の写真を投影しながら説明した。

◇上記説明事項について、以下のとおり質疑応答、意見交換を行った。

委員：ワールド・スタディ講座が面白いと思った。子どもたちに直接、外国人の生の話を聞いてもらうのはとても良い。テレビなどで見聞きするより、双方向のコミュニケーションが取れるので、もっと充実して欲しい。

委員：刈谷市国際交流協会は、個人と団体等で540件会員登録している。また、ボランティアも282人登録している。それぞれ楽しんで活動を行っている。相互に他の関係者ともつながってもらえるとよいと考え、多文化交流フェスタを企画した。国際交流協会とし

てそういった視点も持っていきたいと考えている。

委員：ワールド・スタディ講座に関心を持った。学校現場では、外部講師を呼ぶには少し気合いを入れて準備する必要がある。そのため、やる気のある先生や子どもたちのニーズをキャッチして、教育委員会からもアプローチするとよいと思った。外国人児童・生徒が多い学校には加配教員がいるが、少ない学校では加配教員がいない中で取り組んでいるので、支えていけたらよいと考える。

委員長：ワールド・スタディ講座は、学校現場でどんどん行くとよい内容である。子ども達には目が輝くような体験となる。肌の色が違う人とふれあうことも異文化体験である。留学生は日本語が話せる。そうした異文化体験をした子どもは差別意識がなくなる。国際交流協会では、ホームステイを受け入れる機会が少なくなっているとのことなので、週末に日本にいる留学生にホームビジットしてもらおうようなプログラムを考えたらよいのではないか。

委員：ホームビジットはとてもよいアイデアだと思う。私も海外でホームビジットを経験した時に、交流のハードルが下がったと感じた。自分の子ども世代も海外の人との交流を苦しめない様子を見ている。子どもの頃から異文化に慣れていくことが大切だと考える。

委員長：留学生がワールドデンに参加して、ホームステイも1泊行こうというプログラムがあってもよい。身近なところから始められるとよい。

委員：外国人コミュニティを立ち上げるところから市が関わることは、他の自治体では見られない取組である。今後も取り組んで欲しい。コミュニティの世代交代も重要である。また、各補助金制度もあるので、活用してほしい。

委員：1次計画に関する活動の写真を見ると改めて、エネルギッシュな外国人が多いと感じている。その中でキーパーソンになる人がたくさんいるので、市とも連携していけるとよいと思う。外国人自身が発信していけるとよい。子どもの世代から外国人を身近に感じてもらえるといい。共生だけでなく、一人の人間として高め合うという意味での競争にも役立つと思う。これからも微力ながらワールドデンなどの活動を続けていきたい。

委員長：国際交流や多文化共生というのは、その成果はすぐに出せない。だから、多くの地方自治体では、お金をかけて、イベントで何人の参加者が集まったかという簡単に見える成果を求める傾向がある。それは本当の交流なのだろうか。国際交流や多文化共生というのは、最初は文化摩擦から始まる。摩擦が起こり、衝突が起こり、そしてその摩擦を解消するために相互理解が必要で、そのためにはお互いを知り合わないといけない。偏見や差別を減らすためには、知り合うことが大切である。例えばワールドデンは知り合うための交流である。みんなで農業をすとか、野菜を作るとか、そういう1つのテーマがあつて、そこにみんなが参加し、社会的な地位など関係なく、一緒に参加をして1つの目標に向かって活動する。その出会いを通して顔の見える関係を作りながら交流が発展していく。それを見た人たちがそこに共感をして、新しい人がやってくる。国際交流や多文化共生のプログラムを考える時に、それが一方向的に知るだけの「直流」なのか、双方向

で対話型の「交流」であるのかは、非常に大きな違いだと思う。同時にその企画を考える時に、市民も参加をすることが大切である。ワールドデンは、まさしく1つのモデルになる活動だと思うし、私もこの活動から多くのことを学んだ。

3. その他について

◇事務局から次の連絡事項を伝えた。

- ・ 4月20日、刈谷市国際交流協会総会の際に、榎田委員長が講演を行う。
- ・ 今回で榎田委員長は退任となる。来年度からの学識経験者枠の委員は、東京外国語大学の小島祥美准教授が新任となる予定である。

◇委員長が閉会した。